

「教育臨床総合研究19 2020研究」

学部教育活動評価委員による教育学部外部評価の分析

— 第八期（平成30年度・令和元年度）の評価票から —

Exploring the Third-Party Evaluation on the Education Practices of the Faculty of Education at Shimane University : Evaluation on the Practice of 2019 Fiscal Year.

佐々木 直 樹*

Naoki SASAKI

野 津 翔 平***

Shohei NOTSU

廣 兼 志 保**

Shiho HIROKANE

要 旨

本学部の外部評価委員である学部教育活動評価委員に、2年任期の終了年度末に「外部評価票」による質問紙に答える形で外部評価をお願いしている。本稿では、第八期にあたる平成30年度～令和元年度の2年間の教育活動に対する評価結果を分析することで、今期の成果をまとめるとともに、次期に向けた課題の抽出を試みた。

〔キーワード〕 外部評価, FD

I 学部教育活動評価委員会の役割と活動

山陰両県の学校教員養成を担う学部として平成16年度に改組した島根大学教育学部では、その直後から外部評価に関する組織を設置し、教育改善に努めてきた。その経緯は既行の報告書（参考文献）に詳しい。

また、平成28年度からは、島根大学・島根県教育委員会・鳥取県教育委員会を構成機関とする「山陰教師教育コンソーシアム」が新たに設置され、外部評価もその活動の一環に組み込まれることとなった。同コンソーシアムは、構成機関の連携を推進・強化し、教員養成から教員研修までの教育・研修システムを構築し、地域や学校の現代的教育課題に対応でき、地域の教育力向上に資する教師を育成することを目的とするものである。そのために、島根大学教育学部と島根大学教職大学院における教育活動の評価も、中心的な事業の一つに位置づけられている（「山陰教師教育コンソーシアム規約」平成27年12月25日制定）。

島根大学教育学部の外部評価に関する組織である学部教育活動評価委員会は、その設置要項

*教育学部附属FD戦略センター副センター長（授業改善・外部評価部門長）

**教育学部附属FD戦略センター兼任教員（授業改善・外部評価部門）

***教育学部附属FD戦略センター

〔島根大学教育活動評価委員会設置要項〕平成28年6月1日一部改正)のなかで、学部における教員養成教育の内容、方法、実績等の外部評価に関する業務を行うものとされ、委員は、(1)教育行政、(2)学校教育、(3)社会教育・青少年教育・スポーツ、(4)芸術文化・NPO、(5)企業・報道関係・その他市民社会、の五つの分野から、山陰両県の有識者(分野ごとに2名程度、任期は2年)を選出し、山陰教師教育コンソーシアム会長が委嘱するものとされている。

平成30年度・令和元年度は、平成16年の教育学部改組時から数えると、第八期目にあたる。委員は両年度ともに10名(交代により延べ14名)に委嘱し、任期中の活動実績は下記の通りである。

平成30年度

10月10日(水) 第1回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部附属小学校及び中学校において開催し、学校教育実習Ⅳ(学部3年生による本実習)の視察、および学部教育概要説明と質疑・協議を行った。出席委員は8名。



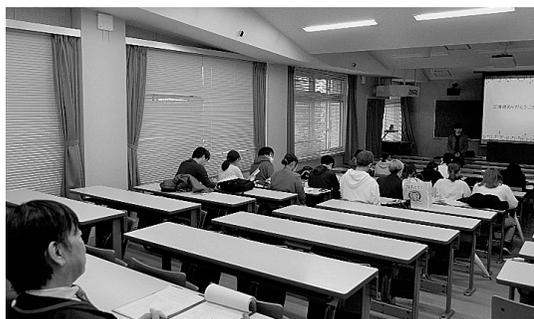
学校教育実習Ⅳの視察(附属小学校)



教育学部概要説明、質疑・協議

12月12日(水) 第2回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において実施し、学部1年生全員を対象とする「学校教育実践学原論」の授業視察、学部3年生の希望者を対象とする「面接道場」での面接(学部教育活動評価委員が面接員役を担当)、および入試・就職を中心とする学部教育現況説明と質疑・協議を行った。出席委員は8名。



学校教育実践学原論の視察



面接道場

令和元年度

9月26日（水） 第1回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において実施し、山陰教師教育コンソーシアム、FD戦略センターの活動を中心とする学部教育概況と、学部2年生を対象にグループ別協議等を通じて1000体験学修の振り返りを行う「充実期セミナー」の視察、および質疑・協議を行った。出席委員は8名。



充実期セミナーの視察



学部概況説明、質疑・協議

12月4日（水） 第2回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において実施し、学部4年生との学生懇談会、学部3年生の希望者を対象とする「面接道場」（学部教育活動評価委員が面接員役を担当）、および入試・就職を中心とする学部教育現況説明と質疑・協議を行った。出席委員は9名。



学部4年生との懇談会



面接道場

2年任期の終了年度には、質問に回答する形で記入していただく「外部評価票」によって、各評価委員の外部評価が行なわれる。その評価票の分析とまとめを行って、次期のFD戦略を企図することが学部FD活動の基軸となっている。本論では、第八期（平成30年度・令和元年度）における本評価票の分析を行い、今期の成果と次期に向けた課題の提示を主旨とするものである。

次章以降、質問紙の様式に沿って外部評価票の記述内容に関する分析を行い、全体的なまとめを行う。

II 島根大学教育学部・学部教育活動評価委員による外部評価結果（平成30年度・令和元年度）

【項目Ⅰ：本学部の地域社会における存在意義、貢献度について】

設問Ⅰ－１ 「教員養成特化型学部」である本学部の「存在意義」あるいは「貢献度」について、みなさま、あるいはみなさまの周囲では、どのように認知されているとお考えでしょうか。率直なご意見をお聞かせください。

【結果と考察】

この質問項目は、本学部の「①存在意義」と「②貢献度」について、委員やその周囲における「③認知度」をうかがったものであり、それに関連して委員からは本学部に向けた「④期待」にも触れられている。

「存在意義」「貢献度」

本学部の「存在意義」に関しては、主として3つの観点から、以下のような回答をいただいた。

第一に、「地元への優秀な教員の輩出、教員研修や出前授業などへの協力、教育政策への知見の提供など、大きな存在感を感じる」など、地方大学固有の役割を重視する回答である。これは、地方が直面している課題に即した存在意義を指摘されたものである。

第二に、「大量退職を迎える教育現場では、次の島根の教育界を担う人材を輩出していただくという点で、島根大学教育学部への期待は非常に大きい」「鳥取県として、島大教育学部の教員養成に期待するところは大きい」「教員養成に特化された貴学部は、個人的にはすばらしい目的とビジョンがあり、よく考えられたカリキュラムであると思いますので、10年後くらいに成果が現れて『存在意義』も『貢献度』も県民には高く認識されるのではと考えます」「山陰両県で唯一の教員養成課程を持つことの意義は極めて大きい。そして責任も重い。地域の未来を形成する人材を送り出すのが教育界の仕事であり、人の動きがどんなに流動化しようとも、教育が地域に及ぼす影響は計り知れない」「島根県内在住者が地元で教員をめざし、学ぶ場としては唯一のものとの認識で、周囲の人もそう思っています」といった回答である。これらは、本学部が島根・鳥取両県の教員養成を担っていることを重要視する意見と考えられる。

第三に、「教育現場に向かって欲しいとは思いますが、教育学部で学んだ学生はコミュニケーション能力など、企業等でも重要視される力を身につけているというイメージが強く、様々な分野での活躍が期待されていると感じています」「これからの教育現場を担っていく学生たちにとって、『1000時間体験学修』などを通じて、地域とのつながりを感じることなどは大変すばらしい試みであると思います」といった回答である。「1000時間体験学修」によって培われた、学生のコミュニケーション力や企画力に着目した意見である。

このように、教員養成学部の一般的な意義にとどまらず、地方の直面している課題や、島根・鳥取両県で唯一の教員養成学部であること、教員養成学部の必要性、教育現場のみならず様々な形での地域貢献など、本学部が担わなければならない多面的な役割を、再認識させられた。

本学部の「貢献度」については、全体的に高く評価していただいていることがわかった。優秀な教員を輩出しているといった評価のみならず、地域の教育を担っていることの重要性や、

地域での活躍が期待される人材の育成について、高く評価していただいた。

「認知度」

本学部の「存在意義」「貢献度」についての「認知度」については、今回も大きく二つの意見に分かれた。

一つは、多くの教員を輩出している教員養成学部として、また学生による地域貢献など、認知度が高まっているといった肯定的な意見である。

しかしその一方で、「鳥取市と松江市との距離（地理的關係）があり、なじみが薄いというのが現実である」「まだまだ『鳥取で教員になるなら鳥根大学へ』という考えが定着していない」「教員に携わる人を除いては、（貢献度が）実は高いという事が、あまり知られていないように思います」といったように、認知度の低さを指摘する意見もいただいた。この点は、従来から何度も指摘されてきたことであり、今後の継続課題となるものとして、捉えておく必要がある。

「期待」

以上の評価から、本学部への期待度の高さが感じられた。地域の教育を担う教員養成学部に対する期待とともに、社会貢献の面で、「文化芸術・文化振興の観点からは、これまでの『特音』が牽引してきた鳥根の音楽教育は全国でも評価されるほどで、県内地域の音楽活動も高水準で活発でした。地域貢献度はそういうところにも顕著に表れていましたので、今後どのように変わっていくのかということ、特に県内の音楽関係者は注視していると思います」といった意見があり、地域の期待に応える学部教育の在り方について、継続的な検討の必要性を感じる。

設問Ⅰ－２ 地域社会に対し、本学部の存在意義や貢献度を高めていくために、今後、どのような努力、工夫、方策、企画を行っていくべきでしょうか。みなさまの視点から、自由なご意見をお聞かせ下さい。

【結果と考察】

回答には、1000時間体験学修、学校現場や教育委員会との連携、教員養成学部としての役割とPRについて、不十分な点を指摘されるとともに、改善についての提案をいただいた。

課題：1000時間体験学修の企画について

学生に対する期待として、「何を学び、何を身につけてほしいか」という点に関する意見・提案である。「地域創生はまったなしで、さらに少子化と相まって教員もなり手不足と、貴学部の養成される教員には、子どもたちの教育だけでなく、地域社会の構成員としての期待も高まっています。子どもたちの理解を深めることは当然のことですが、この地域がどうあるべきか、学生さんにも考え、発信してもらうことも必要ではないでしょうか」「今以上に様々な場所に学生たちが出ていき、子供たちや地域社会の方々と交流できる場が設けられればと思います」といった意見や、「地域社会で学生の姿が見えると大きいです。地域活動への参画が増えるとよいと思います。できれば単発的なイベント運営ではなく、企画から入り、地域住民と協議を重ねることがあれば、地域にとっても学生にとってもプラスになるのではないでしょ

うか」「教育実習は都市部と中山間地・離島を必ず経験すること。短い滞在期間かもしれませんが、若者がその地域に入る影響は大きいと思います。可能でしたら1000時時体験も（どうしても大学周辺の活動が多いのでは?）」といった提案などがあつた。地域に認知され、定着されつつある学生の教育体験活動であるが、教員養成としてのみならず、一社会人としての育成や、地域貢献・地域連携といった観点から、体験学修の内容を検討する必要があると思われる。

課題：学校現場や教育委員会との連携強化について

次に、学校現場や教育委員会との連携を、さらに強化すべきであるという意見である。「柔軟な発想で、様々なレベルでの連携を具体的に言うことが大切」「期限付き講師には、指導員も研修もなく担任を任すことになる。また、研修等で会合に参加することも少ないので、横の関係も作りにくい。卒業生へのアフターケアという意味でもそれらの講師を対象にした研修会を大学でやっていただけるとありがたい」「小中学校の教員が島根大学教員と関わる場を多くされてはどうでしょう。小中学校が、授業改善の講師として島根大学教員を招聘し、最新の情報を伝えてもらったり、指導助言をしてもらったりすることで地域との関わりが増えるとともに、小中学校の教員に『島根大学が山陰地方の教員養成の拠点である』ことが浸透していくと思います」「教師の地域社会への参加。忙しいことは重々承知ですが、学校を悪い意味での聖域にしないためにも、地域の行事やお祭り等に参加できればよい。教師の社会参加には、大学として評価をしてあげて欲しいものです」「学校や教育委員会でも教員の資質や技能の向上を目指した研修をやっているとは思いますが、大学も積極的にかかわるべきだと思う。学校や教員の研究会、教育委員会が主催する場に講師として呼ばれるだけでなく、大学が主催者となり、地元教員のスキルアップや、問題解決の支援をしてはどうか。教育学部にしかできない社会貢献だと思う」といった意見である。山陰教師コンソーシアムを中心とする組織的な連携を活かしながら、学部教員による主体的・積極的な取組みについて、検討が必要であると思われる。

課題：教員養成学部としての役割とPRについて

最後に、地域社会に向けたPRが不足しているという指摘である。「中海圏域にとどまらず、鳥取県や島根県西部にサテライトを置き、様々な啓発活動や研究活動を行うなど、市民の目に見える取り組みが望まれる」「『山陰地方で教員になるなら（鳥取にも大学はあるけれど）島根大学へ』という流れに作ることが大事だと思います。鳥取県教育委員会と連携して実施されている、高校生や進学指導をする高校教員への働きかけを続けることが、保護者や地域の人の意識を変えていくことにつながると思います」「この地域の人に広く知ってもらうことが第一だと考えます。願わくは、島根、鳥取の教員をめざす子供たちが多く学び、そのままふるさとの教師となり、自分の育ってきた地域の子供たちを教えていく事が理想ですし、地域を守ることもなります。教育機関だけではなく、コミュニティや民間企業にも、その必要性を訴えて理解いただきたいと切に願います」などの意見である。本学部の取組みや実績を、広く知らせるとともに、地域との様々な形での連携について、考えていくことが必要である。

【項目Ⅱ：1000時間体験学修について】

学生の「教師力」を培う方策として、本学部では「1000時間体験学修」を導入しています。ここでの設問は、その約半数の時間を占めている、学童保育・社会教育・地域イベント・ボランティア活動・学校での学習支援といった教育活動や地域活動への参加についてお伺いします。

設問Ⅱ－1 学生の活動は、受け入れ先から好意的に受け止められているとお考えでしょうか。

- 1. とてもそう思う
- 2. ややそう思う
- 3. 一概には言えない
- 4. あまりそう思わない
- 5. まったくそう思わない

【結果】集計結果（下図1参照）

10名の委員中、9名が肯定的に回答している。

設問Ⅱ－2 このような体験学修を伴う学生教育は、教員養成教育に必要な取り組みだとお考えでしょうか。

- 1. とてもそう思う
- 2. ややそう思う
- 3. 一概には言えない
- 4. あまりそう思わない
- 5. まったくそう思わない

【結果】集計結果（下図1参照）

10名の評価委員の全員が、肯定的に回答している。

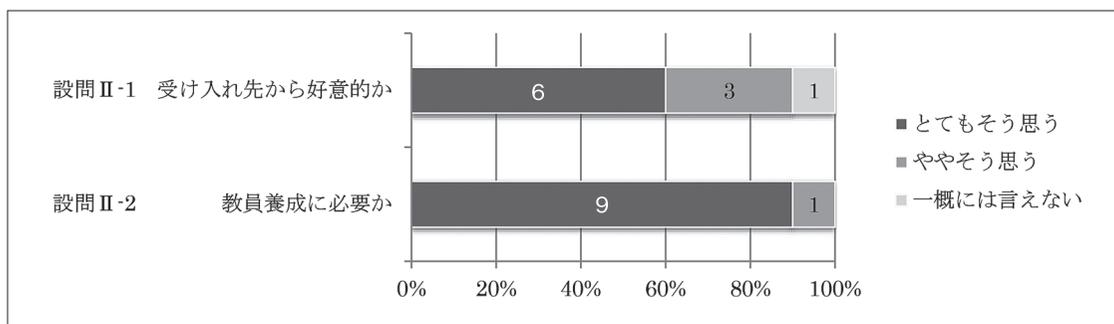


図1 設問Ⅱ－1，Ⅱ－2の集計結果

設問Ⅱ－3 このような体験学修をより有意義に深化させるためには、どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【結果と考察】

設問Ⅱ-1, 設問Ⅱ-2からもわかるように, 1000時間体験学修については, 肯定的に評価していただいている。その一方で, 今後の課題について以下のような意見をいただいた。

課題：基礎体験活動の内容を精査すること

1000時間体験学修の内容や体験先について, 精査する必要があるのではないか, という指摘である。「体験学修が『理論や知識の習得』と『実践』の往還になっているか, 力量の向上や様々な役割を得るもので, 自信につながり『教師力』の高まりを得るものになっているか, 「取り組みが形骸化・画一化していないか, 「学生時代だからこそできることこそ重要である」など, 活動内容の点検・検討について指摘する意見や, 「教育以外の世界をもっと知ったうえで, 教育現場に立ってほしい」といった社会的な活動を重視する意見や, 「即戦力の育成という面で, 学校での学習支援を増やしてほしい」といった教育現場での活動を重視する意見, 「子どもの自然体験活動が少なくなっていますが, 指導者である学校教員もそのような体験が少ない人も増えてきていると言われています。体験学修で, 一度は自然体験活動ができる施設を訪れるようにしてはどうでしょうか」といった各施設での活動を重視する意見などがあった。これらの意見は, 活動の質や種類に関する意見であり, これまでの継続として, 活動の内容を常に点検し, より質の高い活動へと発展させることについて, 考えていかなければならないと思われる。

課題：基礎体験活動の場を広げること

次に, 活動の場を広げることについての意見であるが, 「海外(または国内)でも特徴的な教育を実践している学校の視察ができないでしょうか。カリキュラムの魅力の一つに」という意見があり, 学部の魅力にもつながるのではとの意見があった。海外研修はカリキュラムにあるが, 国内での活動も含め, 活動の発展に向けた検討事項として, 考える必要があると思われる。

課題：受け入れ先との情報共有と事前・事後指導

受け入れ先の情報把握と, 学生の情報に関する共有についての意見である。「受入側も単に人役としてあてにするのではなく, 体験活動の意義を十分に理解してほしい, 大学側は活動の精選が必要である」という意見や, 「体験先の機関, 団体と教育学部との情報共有を密にし, 体験学修での学生の様子や成果, 問題点などがいつでも分かる体制を整えていただきたい」という意見など, 活動先・活動状況の把握による, 体験先の精選, 事前・事後指導についての意見である。こうした問題は, 従来から鋭意取り組んできた課題ではあるが, 点検・改善に一層の努力が必要であることを指摘されたものとする。

【項目Ⅲ：面接道場等のキャリア教育について】

キャリア教育の一環として実施する「面接道場」は, 教育実習を終え就職活動が間近となった学生が「将来, どのような人生を歩んでいきたいか」「自分がやりたいことは何か」「そのために今自分がすべきことは何か」について, 人生の先輩であるみなさまから面接を通してアドバイスをいただくことによって, 自分を見つめ自分の課題に気づききっかけを得ることを目的として行っています。

- 設問Ⅲ－１ このような面接道場は、キャリア教育に必要な取り組みだとお考えでしょうか。また、そのように考えられる理由をお聞かせください。
1. とてもそう思う
 2. ややそう思う
 3. 一概には言えない
 4. あまりそう思わない
 5. まったくそう思わない

【結果】集計結果（下図 2 参照）

10名の委員の全員が肯定的な評価だったが、「とてもそう思う」は半数の5名であった。

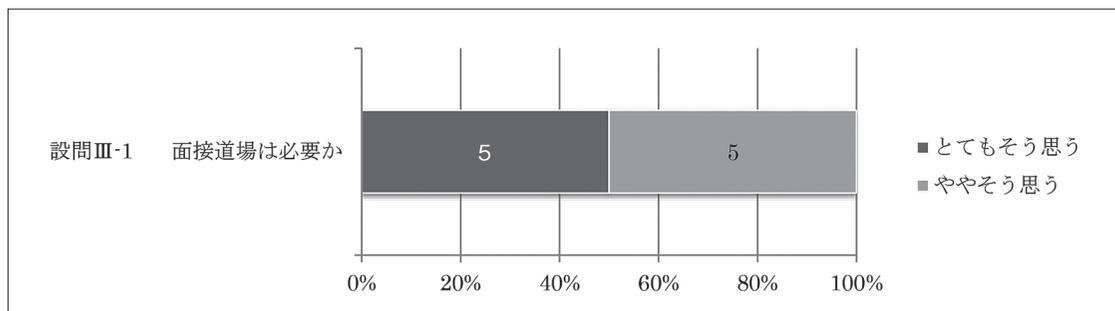


図 2 設問Ⅲ－１の集計結果

「1. とてもそう思う」と回答した委員からは、「高校までで体験していない学生もおり、自己表現のトレーニングの場であると思います。多様な意見・評価を聞くことは、『教師力』養成に大きく役立つでしょう」「現場・社会の空気感に触れることに意味がある」「どのような職に就いたとしても、自分自身を見つめ直す機会は必要なものだから」「学校現場でも『生き方を学ぶ』という視点を持ち、様々な分野の人々との関わりを大切にされたキャリア教育が展開されており、大学生にとってもそれは同じかと思います」「面接に向けて、自己を見つめなおすことで、今後の教育学部での学びに対する意識付けができるのではないのでしょうか」といった、面接を通して学ぶことの意義、自己の振返りの重要性などが理由として挙げられた。

「2. ややそう思う」と回答した委員からは、「メタ認知を図る一方策ではあると思います」「人数が多く、個別に質問することはなく、後半の話もそれぞれの方への話ではなくて一般的な話であったため」「どうしても採用試験の面接の練習という側面から、学生も委員も『面接道場』の目的を達成するような話し合いの場になりにくいと感じました。また、希望する学生が少ないのも気になります」「面接道場は学生がそこに『参加しよう』と思い、申し込みをした時点で目的は達している気がする。面接で何を話すかよりも、外の人間と接してみようとするのが重要であって、面接会場で何を話すか、どんな立ち振る舞いをするかは、単なるテクニク論」「ほとんどの学生が、このような面接をする事が初めてと言っておられ、場数を踏む上で良いと思うし、学部外のもの面接官をすると緊張感も生まれ心構えも変わってくると思う。専門の方々の貴重な意見も聞くことができ、とても参考になると思います」など、面接道場の意義は認められるものの、学生への周知方法や、面接道場の意義の伝え方など、実施する側の運営面について、改善すべき点があるとの指摘をうけた。

設問Ⅲ－２ このような面接道場をより有意義に深化させるためには、どのような方策が考えられるでしょうか。また、キャリア教育を進めるためには、面接道場以外にどのような取り組みが考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【結果と考察】

面接道場については、「面接の経験も大切ですが、その前にゆっくりと問いへの答えを考え、解答について議論しておくことも大切であると思います。そもそも『どのような人生を歩みたいか』という大きな問いなどは、考える時間が必要です。それに、自己の経験を整理しておくことが面接の素材となります。論理的・構成的な話し方や伝え方の訓練も、モチベーションの高いこの時期に有効であると思います」「型にはめるのではなく、型を破るための道場にしてほしい」「様々な分野に身を置く大人との出会い、関わり（協議の場）があることが大切だと考えます」「『上手な面接の仕方』を伝授するハウツー教室にはしないほうがいい。面接官はたとえば子どもでもいい。あるいは障がいのある人、LGBTや在留外国人といったマイノリティ。こうした人と、どうコミュニケーションをするのか。教師はもちろんどんな職業についていても、有意義な体験ができると思う」などの意見をいただいた。面接道場という名称にとらわれ、面接を受けるという事に重点を置きすぎず、時間をかけて自己を見つめなおす場、様々な分野・立場の人との関わり、コミュニケーションの場としたほうが良いとの意見があった。

面接道場以外の取り組みについては、以下のようなものが提案された。

- ▽1000時間体験学修、面接など、自己理解と啓発的経験を有機的に結びつけるロジックとシステム化。
- ▽1000時間体験学修なども含め、様々な分野に身を置く大人との出会い、関わり（協議の場）。何かテーマを設け、協議してみるのも面白い。
- ▽「社会人から学生へ」ということで、委員から学生に「期待すること」を言ってもらう時間をつくるのはいかがでしょう。いろいろな分野の方が委員なので、違った視点での話が出るように思います。
- ▽著名な教育者（研究者）や文化人の講演会。講演の内容によっては、聞くだけでもいつまでも学生の心に残る話や言葉は有意義。できれば、その後学生10人くらいと講演者の「語り場」があれば、評価委員と学生との語り場でも良いかもしれません。学生の人数が多い方が、学生から質問も生まれやすいかもしれません。
- ▽懇談会のように、学生側からも自由に話ができる時間があると良いと思います。
- ▽教育センター所長や社会教育主事の方々のお話は学生にとっても、とても有意義なようでした。特に午前中の4回生との懇談会では、すでに教員に合格された2人と小さい机を囲んで現場の話や心構えなど深い内容でとてもよかったです。

授業や体験学修で得られた知識や経験をもとに、社会に出る準備段階として、様々な分野の方々との交流の機会を作る取り組みの提案が多いと考える。

【項目Ⅳ：学生の育ちについて】

本学部では「教師力」を3つの分野からとらえるとともに、それぞれを次のように意味づけています。

- ① 教育実践力：学習者を理解し、身につけた知識や技能で教育を実践する力
- ② 対人関係力：相手や目的に応じて適切なコミュニケーションを行う力
- ③ 自己深化力：必要な情報をさまざまな方法で探したり発信したりして、自己の知識や能力を深める力

設問Ⅳ 本日の学生懇談会や、面接道場、あるいは体験学修等における学生の様子をご覧になられ、学生の育ちに関する印象を、上に示した3つの分野を参考にされながらお聞かせください。

【結果と考察】

4年生に対する好印象の意見をはじめ、学生に対する印象として、積極性や真面目さが回答に多く、学生の育ちについて、一定の評価を得たと考える。ただし、「面接道場の希望者が少ないのは向上心が無いのか（自己深化力が低いのか）、学生から必要とされていないのかは取材された方が良いと思います」「学生間の能力差というものも、どうしてもあると思いますので、今現在力のある学生よりも、その力が足りていない、意識付けが足りない学生をフォローすることが大事だと思います」といった、面接道場に参加した学生だけでなく、参加しなかった学生の状況把握など、細部にわたる学生へのケアの重要性についての指摘があった。

①教育実践力について

教育実践力については、身につけている、身につけようと意識しているとのコメントもあったが、教育実習の視察や、実際の教育現場と実習との違いから、身につけていない、そもそも身につけるのは難しいとの意見もあった。

②対人関係力について

②対人関係力については、「コミュニケーション力は、かなり身につけていると思った」「面接した方たちは、明るく頼もしい方が多かったです。学内だけでなく、多くの人に接しながら、よい学びをされてきたと感じました。支えてこられた多くの方に感謝するとともに、教育現場での活躍を大いに期待しています」「教師としてやっていくという自覚からか、自分の意見や思いを相手に伝えようとする意思があり、話していて気持ちよく好印象です。対人関係力については、持って生まれたものか4年間で培ったものかは分かりませんが、良いと思います」などのように、かなり育っているとの評価を多数いただいた。また、「現場で求められる臨機応変さというか、マニュアル通りに行かない場面でも何とかできそうなくまじさみみたいなものは感じられないかなど。しかしながらそれは、大学でどうこうではなく、いろいろな経験から自然と身につけていくものであると、難しいところではあります」「附属での教育実習で成果を上げた人、自分ではできると自信をつけた人ほど、学校現場に入ってみて『こんなはずじゃなかった』と思うのでは、と心配になる。附属のような一定の学力レベルの子どもばかりの学

校は実際にはないはず、『相手』に応じたコミュニケーション能力は、就職後に身に付けるしか、すべはない」など、コミュニケーション能力の重要性和、身につけることの難しさについて、あらためて指摘された。

③自己深化力について

③自己深化力については、面接道場や学生懇談会に参加した学生は、かなり育っているとの評価が多かった中、「他学部の学生であっても、確固とした意志や目的意識、そして、様々な味を持っている学生さんがいた気がします。要は、自分磨きの場として大学が機能しているか、学生の立場からすると、有限の時間を自分の頭で考え、行動する中で自己啓発に結びつけるかが大切なのだと思います」といった、学生を育てる環境作りの重要性についての意見をいただいた。

【項目Ⅴ：教員志望状況や入学希望者動向について】

＜教員志望状況について＞

設問Ⅴ－１ 平成30年度及び令和元年度の教員採用試験受験率について、率直な感想をお知らせください。

平成30年度：卒業生168名 うち教員採用試験を受験した者120名 受験率71.4%

令和元年度：卒業予定者172名 うち教員採用試験を受験した者 99名 受験率57.6%

1. かなり多いと思った
2. 多いと思った
3. どちらともいえない
4. 少ないと思った
5. かなり少ないと思った

設問Ⅴ－２ 平成30年度及び令和元年度（平成31年）の教職就職率について、率直な感想をお知らせください。

平成30年度：教師の道へ進んだ者 93名（非常勤講師/保育士を含む） 教員就職率57.8%

令和元年度：教師の道へ進んだ者105名（非常勤講師/保育士を含む） 教員就職率62.5%

1. かなり多いと思った
2. 多いと思った
3. どちらともいえない
4. 少ないと思った
5. かなり少ないと思った

【結果】集計結果（右図3参照）

10名の回答中には、「5. かなり少ないと思った」はなかったものの、7割の方が、多くはないと感じられたことがわかった。

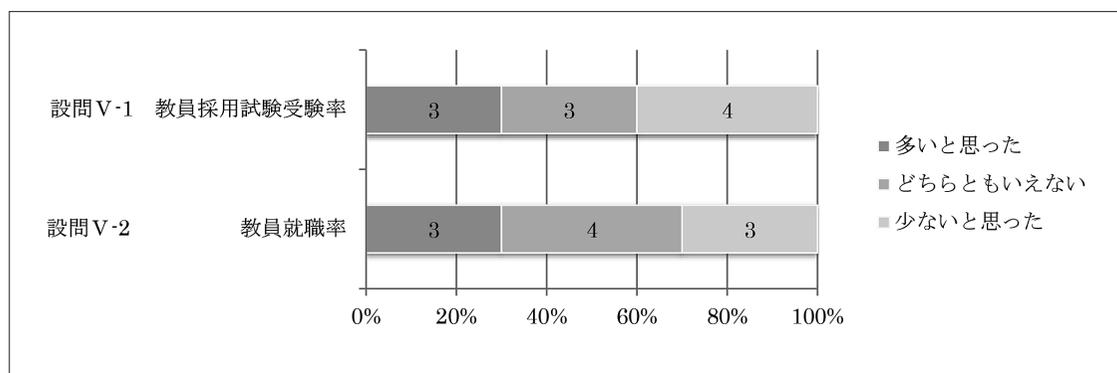


図3 設問V-1, V-2の集計結果

<入学希望者動向について>

設問V-3 本学部への入学志願者を増やすためには、どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【提案】

- ▽全国的な課題であり、これといった策は持ち合わせていないが、学校現場も採用側も一体となって取り組むことが方策として求められていると思う。鳥根県で、あるいはそれぞれが望む地で、教員として生きていこうという思いをもった人を、それぞれの立場で増やしていくシステム作りが必要である。
- ▽テレビ新聞等のマスコミやインターネットを使い、どんどんPRをしていくべきではないか。現在のすばらしい取り組みを、高校生や中学生、小学生にまで伝えていったらと思う。
- ▽教師が若い人にとって魅力ある職業にならない限りは難しいと思う。決して大学側の責任ではないが、強いて言えば、子どもたちにとって魅力を感じない職業としての教師像を築いてしまった卒業生たちに、責任はあるわけで、大学には「製造物責任」があるといえる。大学が現役教師たちの、せめて「保健室」的な存在になるなど、もっと現場に積極的に関与しては。
- ▽卒業生の小中高生へのかかわりの機会を多くすること。
- ▽鳥根県では、「教育の魅力化」を言っているが、現場としては「教職の魅力化」を言っている。やはり「教職の魅力」をアピールしていくのが王道。
- ▽景気変動や採用数により、必ず狭き門になる時期が遠からず到来する。一喜一憂せず、不断の歩みをされること。
- ▽今後の大量退職、大量採用を考えると、思いや力がある皆さんに教員を目指していただきたいので、もう少し教員が魅力ある仕事なのだと見せていかないといけない。やりがいをもてる仕事だと感じられる、映像等が欲しい。ブラックなイメージを、変えないといけない。
- ▽高校生向けに限定しない積極的な情報発信、本学部の特色・魅力づくりの検証、さらなるカリキュラム開発、不易と時代に対応した（時代を先取りした）教育。
- ▽第1に、山陰両県の教師の働く環境の改善。大学が、教師の働く環境の調査と改善に取り組

む。文科省へ積極的に提言することは、成果が現れれば注目を集め、山陰で教師になりたいと思う学生は増えると思う。第2に、魅力的なカリキュラムを、高校の教職員や一般の大人に理解してもらうための発信。マスコミに取り上げてもらえるよう、現カリキュラムを受けた卒業生が現場で活躍し、成果が少しでも観られたら、遠慮なく発信していくことが大切。

▽地元の高校、さらに地元の中学校や小学校において、様々な連携をはかり、教員という選択肢を子供たちに知ってもらうことから始める。地元の高校生を対象とした教員養成の為の授業を行うなどして、早め早めに島根県、鳥取県の高校生にアプローチしていただきたい。ブラックという印象を払拭する為、様々な教育機関と連携していくべき。

教職に対するイメージの改善から魅力の発信、大学のカリキュラム改善と、実績に関するアピール、地域や教育機関との連携など、多くの貴重な意見をいただいた。

【項目Ⅵ：その他、学部に対するご意見やご要望など】

これまでにご回答いただきましたⅠ～Ⅴ以外の事項につきまして、学部に期待することも含め、ご意見やご感想がありましたら以下に自由にご記入ください。

【ご意見（自由記述）】

- ▽今後も、しっかりと連携させていただきたい。
- ▽島大近辺の学校には1000時間体験学修に出かけやすいが、遠くの学校には、通勤関係で、でかけにくいと聞く。何らかの補助制度があればと思う。
- ▽学生の皆さんは今後の社会を担う皆さんであり、さらに教職に就けば、次の世代を育てていく役割も担うことになります。自らが様々な経験をし、様々なことを感じ、いずれ自分の言葉で、自分の思いがしっかりと他者に伝えられる、そんな教師（大人）になって欲しいと思います。
- ▽今回、このような機会をいただき、自分自身もいろいろ考えるところがありましたし、学生の皆さんから大変刺激も受けました。1年間ありがとうございました。
- ▽教員養成特化型に移行して、成果が現れるのは正直10年後以降だと思います。基本の方針は大事に、ブレずに長い目で進めて言って欲しいと願います。学部の改革にあたり、積極的に地域に出ていく姿勢、外部の意見を聞く姿勢には感銘を受けました。子どもたちを取り巻く環境や学校生活の環境も変化し、SNSなど社会の仕組みも国の方針も変わり厳しい時代だと思いますが、未来を担う子どもたちが明るい社会を築いていける大人に成長できるよう、貴学部と卒業生には期待しております。
- ▽評価委員をさせていただくまで、貴学部の内容について存じ上げないことがほとんどでありました。しかし、今では、貴学部の地域教育における重要性、そして、それを発展させていくための様々な取り組みを知ることができました。私も周りの人間に貴学部のことを話し、少しでも力になればと思います。これからも地元にも1人でも多くのすばらしい教員を送り出していただけることを期待しています。

▽これまでの意見は、実は島根大に限ったことではなく、全国の教育学部を持つ大学にいたる話だと思う。島根大だけがどうこうという問題ではなく、中にはオールジャパンで解決すべき側面は少なくないだろう。その中で、島根大が独自性を発揮するポイントはある。山陰という比較的コンパクトな人口構成の地域に、一つしかない教育学部というポジションを、もっと強みにするべきだ。例えば鳥取、島根の学校現場を比べても、運営の仕方や授業の進め方、住民の気質など、結構な違いがあるのでは。そこになんらかの人的交流が生まれれば、大学、小中学校、あるいは教育委員会にとって、さまざまな気付きが生まれるかもしれない。両県に人材を送り込む島根大教育学部は、「触媒」として機能する可能性を秘めていると思う。隅々まで目配せをする上では、山陰の人口規模は、実は程よいのではないかと思っている。上京したとき、どこまでもビルと家が続き、山も見えない関東平野を目の当たりにするたびに、自分はこの山陰くらいのスケールが、生きていくのにちょうどいいと思った。学校も一緒だ。今ぐらいの学校数、今ぐらいの子どもの数が、実はちょうどいいのではないか。そこで質を向上させればいいだけの話だ。山陰にいることは、決して弱みではない。強みに転じる知恵と工夫を、大学には求めたい。

▽2年間評価委員をさせていただき、初めて分かった事がたくさんありました。2年経って、教育学部について、やっとわかってきたという感じです。大学を取り巻く環境が年々厳しくなる中で、常に変化に対応し、4年間かけて教員を育てるという目的を達成する為に、日々努力をされている教育学部関係者の皆様には、敬服致します。附属学校園の方も、まさに変革の最中であり、保護者としては子供の為に、又学校の為、先生方の為に、もっと何かできることはないか、一つでも二つでも協力できることはないか、という思いになりました。教育学部を卒業し、教員の道へ進まない学生の数を見ると、本当に教員を志して入れなかった子供がいるのでは？という思いになり、残念な気持ちにもなります。地元の教員を目指す子供たちが、一人でも多く教職に就くことを、期待しております。

Ⅲ まとめ

以上の結果を、項目ごとにあらためて整理し、俯瞰的に見ることで、今後、学部として取り組むべき課題をとらえていきたい。

項目Ⅰの「存在意義」「貢献度」については、教員養成という目的にとどまらず、山陰地域の様々な課題への取り組みや、地域に貢献し活躍できる人材の育成といった、多面的な役割を担っていることについて再認識することとなり、地域との連携強化とカリキュラムの点検・改善への努力が、継続課題である。認知度を高める努力については、現在でもなお不足していることが結果として示された。特に鳥取県東部、島根県西部へのアピールについて、具体的に提案いただいた意見を参考に、一層力を入れていかなければならない。

項目Ⅱの「1000時間体験学修」については、これまでの継続として、活動内容を精査するとともに、活動の場をさらに広げ、活動の受入先との情報共有を密にし、学生に対する事前・事後指導を徹底することが必要であると指摘された。1000時間体験学修の目的と方法について、様々な観点から、引き続き改善し続けることが必要であると再認識させられた。

項目Ⅲの「面接道場」については、その意義については評価いただいているが、「面接」という形式よりも、より自由に活発に意見交換できる場の設定や、先輩の講演を聞くような企画、懇談会など、他の形式による企画の提案が多くあり、今後の企画検討事項としたい。「面接道

場」の参加者が少ないことについては、実施する際の周知方法や、意義についての説明など、運営面での努力が必要であると考え。

項目Ⅳの「学生の育ち」に対する評価については、全体的に肯定的な評価をいただいたが、その一方で、大学教育だけでは身につけられない力もあるとの意見があった。また、面接道場や学生懇談会に参加しない学生についての指摘があり、隅々までの指導の徹底とともに、学生全体の実情についての提示方法について、学部教育活動評価委員会の課題として、今後検討する必要がある。

項目Ⅴの「就職希望状況や入学希望者動向」については、教師という職業の良さを発信することの必要性や、本学部の教育や魅力について、積極的にアピールしていくことの重要性が指摘された。すでに実施していることではあるが、より効果的な方法を模索し、展開していくことが必要であると考え。

なお、教育内容について高評価を得ながらも、学生時代だからこそできることへの取り組みや、自ら考え行動する力の育成、地域社会とともに課題を解決する活動など、多くの意見が出された。これらは、教育改革に向けた提案として貴重な意見であるが、その中には、既に取り組まれているものや、改革を進めているものもあり、学生の日常的な体験活動の様子や、自主的な活動の視察をしていただく機会を設定できなかったという点で、学部教育活動評価委員会のあり方を検討する上での重要な課題である。

以上、すべての項目にわたって示された評価・意見を分析し、今後本学部が取り組むべき課題を明らかにした。貴重なご意見・ご提言をいただいた、学部教育活動評価委員各位に対し、厚く御礼申し上げたい。

参考文献

- 1) 教員養成GP報告書『戦略的FDによる資質向上スパイラルの実現』（平成19年3月 島根大学教育学部）
- 2) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第四期（平成22年・23年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.11』御園真史・百合田真樹人・原 丈貴・田邊美沙・河添達也（平成24年7月）
- 3) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第五期（平成24年・25年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.13』原 広治・塚田真也・畑 智子・河添達也（平成26年7月）
- 4) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第六期（平成26年・27年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.15』原 広治・畑智子・河添達也
（平成28年8月）
- 5) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第七期（平成28年・29年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.17』長谷川博史・佐々木直樹・畑 智子・近藤翔平（平成30年9月）